

11. 和魂漢才

最近また風邪で伏して、仕事ができず、本を読んで暇つぶしをするしかなかった。その一は Francis Espinasse の『ヴォルテール伝』という小冊子で、読んでとても面白かった。その一は加藤咄堂の『民間信仰史』で、五百ページもあるけれども、やはりとても愉快地に読み終えた。第六章で“文化の民族化”を論じたところに、なかなか素晴らしい話がある。つまり儒学の大家菅原道真（845～903）がかつて、“凡そ神国一世無窮の玄妙は、得て他国の伺い知る所にあらず、漢土三代周公の聖經を学ぶと雖も、革命の国風深く思慮を加ふべきなり”と言った。彼はかつていわゆる和魂漢才を主張した。これは張之洞のあの中学を体と為し西学を用と為すのとまさに同じである。菅原は中国の唐末に生まれ、十一歳で詩を能くし、君に仕えて忠を尽くし、同僚の讒毀するところとなって、筑紫に流謫して死んだ、後人が崇めて天満宮として祀った。ちょうど中国の文昌帝君のようなものだ。

同書は又『桂林漫録』を引いて、中国の經典の中で『孟子』だけは、あるいは民は貴しを主張したためか、日本の神道の御意と合わず、そのため船中にもこの書が載せてあれば、必ず転覆沈没に遭ったと言う。明の謝在杭の『五雜俎』も、また“倭土もまた儒書を重んじ、仏書を信じる。およそ中国の経はみな重価を以て購ったが、ただ『孟子』だけがない。この書を携えて行く者があると、船が覆没して溺れた”と言う。これはむろんただの伝説に過ぎないが、その意義はとても重大である。日本の“中学を体と為し西学を用と為す”という主張は実に中国よりももっと久遠強固である。張之洞の格言は日本では一千年前にすでにあつたのである。以後この主張がどれだけ長く維持できるかは、まだ将来を待たねばならない。だが中国の国風は革命的であつて、もしもいわゆる体となる中学が革命的な性質のものでなければ、当然存立できない。この点はまだ解決が難しくない。謎の国はあるいはやはり日本の方であろうか。

※初出：1926年1月25日『語絲』第63期